

# コミュニケーション相手の集団成員性と コミュニケーションの開放性が 感情共有と結びつき知覚に及ぼす影響 －LINEトーク画面を用いた検討

小森 めぐみ<sup>\*1</sup>, 田中 知恵<sup>\*2</sup>

本研究では、二者間のコミュニケーションにおいて、集団成員性と開放性（第三者の存在の有無）が感情共有や関係性認知に及ぼす影響について、ウェブ実験を用いて検討した。646人の参加者が架空のLINEメッセージを呈示され、自分の感情や送り手の感情推測、送り手との結びつき知覚などを回答した。送り手の集団成員性が操作され、個人メッセージかグループトークかで開放性が操作された。実験の結果、集団成員性と開放性は感情共有に影響を与えなかったが、送り手と感情共有をした場合、しなかった場合と比べて態度共有も促進され、送り手との結びつきも強く感じられた。また、送り手があわれみの感情を表出している場合、他の感情は抑制された。これらの結果から、感情共有が他者との関係性維持に貢献することが示され、また、表出される感情の内容も感情共有に影響を及ぼす可能性が示唆された。

キーワード：感情共有， 集団成員性， 開放性

感情は、それを感じている個人の認知に様々な形で影響を及ぼすことが知られている (e.g., Schwarz & Clore, 2003)。しかし、感情は個人の内的経験であると同様に、様々な形で表出され、他者の目にさらされる。表出された感情は、他者に自分の感情状態を知らせる機能をもつが (e.g., Ekman & Friesen, 1975)、それと同時に表出を目にした他者にも何らかの感情を生じさせることがある。たとえば、自分が何かに成功して喜んでいるときに、その喜んでいる様子を見た他者も一緒に喜んだり、他人が悲しんでいるところを目にしたときに自分自身も悲しく感じたりする。こうした経験を相手と共有することは感情共有 (emotion sharing, social sharing of emotion) と

※1 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部准教授

※2 明治学院大学心理学部教授

呼ばれている (Peters & Kashima, 2007)。

感情共有はどのような場面で促進されやすいのだろうか。本研究では、自分自身が感情関連のコミュニケーションの受け手となる場面をとりあげて、どのような場合に感情共有が生じやすいかを実験的に検討した。特にコミュニケーション相手(送り手)の集团成员性と、そのコミュニケーション場面における第三者の存在(コミュニケーションの開放性と呼ぶ)が感情共有に及ぼす影響を、若者に広く用いられているコミュニケーションツールであるLINE画面を用いて実験的に検討した。更に、感情共有をすることがコミュニケーション相手との関係性認知や行動に及ぼす影響についても検討した。

### 感情共有の促進・阻害要因

感情共有について、たとえ語られるエピソードが同じであっても、それが伝えられる文脈に違いがあると、共有の程度に差が見られることが複数の研究で示されている。たとえばPeters & Kashima (2007)が行ったシナリオ実験では、参加者は受け手の立場に立って、送り手が友人の経験について語り、それに対して何らかの感情を表出するのを聞くという場面を呈示された。半数の参加者に呈示された場面では、送り手が表出した感情は語られた出来事から容易に推測できるものだったが、残り半数に呈示された送り手の表出感情は、語られた出来事からは推測しにくいものだった。参加者にこのような場面で自分がどう感じるかを尋ねたところ、送り手が推測しやすい適合感情を表出した条件のほうが、適合しない感情を表出した条件よりも感情共有が行われやすかった。更に、適合感情が表出された条件のほうが、送り手に対する結びつきが強く感じられ、友人に対する態度にも協調が見られた。つまり、コミュニケーションの送り手と感情が共有できるかによって、送り手に対する認知や行動にも違いが生じていたのである。ただし、この研究に対しては、参加者が送り手の表出とは無関係に、語られた出来事に適合する感情を報告していただけで、必ずしも感情共有が行われていたとは限らないという可能性も考えられた。

そこでPeters & Kashima (2007)の手続きを改善し、更に送り手の発信内容以外の文脈情報が感情共有に及ぼす影響についてさらに検討したのが田中 (2019)である。この研究では、送り手から伝えられるエピソードを複数の感情が生じうるもの、つまり適合感情が複数ありえるものに変更した。その上で、送り手の集团成员性が感情共有や送り手との結びつき知覚に影響する可能性を検討する実験を行った。実験の結果、受け手自身の感情については、「おもしろさ」に関して表出×集团成员性の交互作用が有意に見られ、内集团成员が「あこがれ」を表出した場合に、「おもしろさ」が抑制されていた。結びつき知覚は、外集团成员が「あこがれる」と表出していた場合にもっとも強く、行動協調に関しては条件間の差が見られなかった。また、田中・小森 (2020)は田中 (2019)とは別のエピソードと操作を用いて集团成员性の影響について検討した。その結果、感情共有の程度には条件間の差が見られなかったが、結びつき知覚には集团成员性と表出感

情の交互作用効果が見られた。

田中（2019）と田中・小森（2020）の結果は必ずしも一貫するものではないが、送り手の集団成員性の違いが、その送り手によって表出された感情の内容との組み合わせに応じて、受け手の感情や送り手に対する結びつき知覚に違いをもたらしている。いずれの実験においても各感情はエピソードに合致していることが予備調査で確認されているため、この結果をPeters & Kashima（2007）の適合・不適合に沿った形で解釈することは難しい。こうした組み合わせの効果が頑健に見られるかどうかについては、引き続き検討する必要があるだろう。また、集団成員性の効果は一部でしか見られていなかったが、参加者がコミュニケーションの主体となるような場面では、結果に違いが生じる可能性も考えられる。

### 本研究の目的と仮説

そこで本研究では、田中・小森（2020）の手続きを一部修正し、再検討を行った。また、これまで操作レベルで明確にしてこなかった各指標における仮説を明示し、事前登録を行う形により厳密な検証を行った。

先行研究との違いの一点目として、集団成員性の操作を変更した。田中（2019）では内集団成員条件と外集団成員条件で、参加者がコミュニケーションに積極的に参加している程度が異なっていた。田中・小森（2020）では両方の条件で、参加者が別の二者によるコミュニケーションを漏れ聞くとする形に変更した。しかし、参加者がコミュニケーションに積極的に参加をしていない場合、そのコミュニケーションの重要度はそもそも高くはないものとして考えられ、感情共有が起きにくくなるかもしれない。そこで本研究ではいずれの条件においても参加者が送り手と直接コミュニケーションをとっている形に変更した。

変更の二点目として、コミュニケーションの開放性の違いを独立変数として新たに設定した。コミュニケーションの開放性とは、二者間で行われているコミュニケーションを第三者が観察したり参加したりすることが可能かを指す言葉とする。コミュニケーション開放性の高い状況、すなわち二者間のコミュニケーションの場に第三者が居合わせる状況では、開放性が低い状況と比べた時に、より積極的に感情共有が行われる可能性が考えられる。特にそのコミュニケーションが内集団成員同士で行われている場合には、送り手への感情共有を積極的に示すことは、他の内集団成員にも、自分がメンバーに対して共感的にふるまうことができるような、集団成員としてふさわしい人間であることの証明ともなる。よって、内集団成員と開放性が高い状況で行うコミュニケーションでは、特に感情共有が促進されると考えられる。

変更の三点目として、感情コミュニケーションの呈示場面を携帯メールの画面呈示ではなく、LINEのトーク場面として呈示した。LINEは特定相手とメッセージをやりとりするSNSの一つであるが、一人の相手とのやりとりがメッセージ単位ではなく相手単位で表示され、コミュニケー

表1 作業仮説一覧

no	仮説
仮説1	送り手表出と一致する感情は、不一致感情よりも強く推測される
仮説2	送り手表出と感情価が等しい感情は、等しくない感情よりも強く推測される
仮説3	送り手表出と一致する感情の方が不一致の感情よりも強く感じられ、内集団・開放性高条件においてその差がもっとも大きい
仮説4	送り手表出と感情価が一致する感情の方が不一致の感情よりも強く感じられ、内集団・開放性高条件においてその差がもっとも大きい
仮説5	感情相関は、内集団成員条件で外集団成員条件より高く、その値は内集団・開放性高条件において最も大きい
仮説6	送り手の表出スタンプと感情価が一致するスタンプは、内集団・開放性高条件においてもっとも選択されやすい
仮説7	送り手の表出スタンプと感情価が一致するスタンプは、感情一致高群で感情一致低群より選択されやすい
仮説8	送り手の態度推測と受け手の態度の相関は、感情一致高群で感情一致低群より大きい
仮説9	送り手との結びつき知覚は、感情一致高群で感情一致低群より高い
仮説10	「スタンプを送らない」は感情一致高群で感情一致低群より選択されにくい

注) OSFには個人差尺度を含む仮説も登録したが、紙面の都合上本稿からは割愛する。

ションの流れをたどることが容易である。更に、吹き出しの形でのメッセージのやりとりや、スタンプと呼ばれる絵文字の利用がコミュニケーションをより容易にしていることもあり、多くの人々に用いられている。LINEスタンプには感情状態を表すものも多くあり、それを使用したコミュニケーションを行うことは参加者にとっても身近なものと考えられるため、より現実に近い形での場面想定が可能になると考えた。

二者間のコミュニケーションにおいて、相手が内集団成員であるほど、また、開放性が高いほど、相手の感情を共有するだろう。さらに、相手の感情を共有するほど、送り手が語るエピソードに登場する人物（ターゲット）に対する態度も共有し、送り手に対して結びつきを知覚するだろう。また、続くコミュニケーションにおいて自分の感情を表出しやすいだろう。事前登録した作業仮説については表1に示す。

## 方法

オンライン調査会社freeasyに委託して、事前調査（スクリーニング）と本実験からなる質問紙研究を実施した。まず事前調査でLINEを日常的に利用している20歳前後の学生を抽出し、個人差を測定した上で本実験への参加募集を行った。参加者にはfreeasy社が設定した基準に対応したポイントが参加報酬として付与された。参加者数はgpowerを用いた検定力分析（効果サイズ中、

有意水準0.05, 検定力0.8) を行った上で条件数および不誠実回答(全体の2割と想定)を削除する可能性を考慮して, 224名(男女均等割り付け)とした。

### 実験参加者

事前調査でLINEを日常的に利用していることが判明した20歳前後の学生809名に本実験への参加を依頼し, 646名(男性280名女性366名, 平均年齢20.57歳)が参加した。

### 実験計画

送り手表出(笑顔/泣き顔)×集団成員性(外集団/内集団)×開放性(低/高)の3要因2水準参加者間要因であった。

### 手続き

参加者には本研究が「SNSでのコミュニケーションに関する心理学研究」であると説明した。参加者は, 自分が大学のスポーツサークルの渉外担当であると想像した上で, 知り合いであるA(送り手)から送られてきた「友人が体育の授業のサッカーではりきってシュートを決めようとしたが, 空振りをしてひっくりかえって足首をひねった」というエピソードとスタンプが描かれたLINE画面を呈示された(図1)。LINE画面は条件に応じて8パターンあった。参加者は受け手としてこのLINE画面上でのやりとりについて複数の質問に回答した。すべての質問回答が終わってから, 最後の画面でディブリーフィングが行われた。実験の手続きは淑徳大学倫理委員会の承認を受け(承認番号2022-201), OSFで事前登録された(<https://osf.io/tsbej>)。

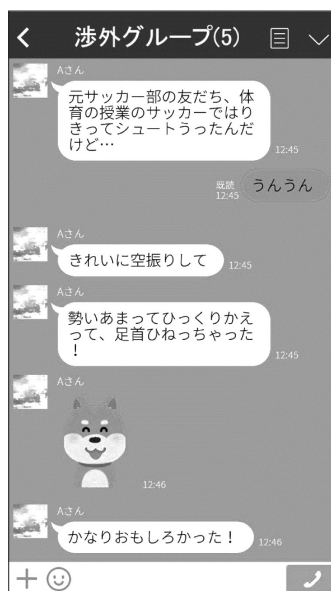


図1 実験で呈示した架空のLINE画面(外集団・開放性高・笑顔スタンプ条件)

## 独立変数の操作

送り手の表出感情の操作は、呈示されたエピソードに続けて送り手が送信したスタンプの種類によって行った。笑顔条件では、送り手はエピソードの説明に続けて笑顔のスタンプと「かなりおもしろかった!」というメッセージを呈示した。泣き顔条件では、エピソードの後に泣き顔のスタンプと「かなりかわいそうだった…」というメッセージを呈示した。

送り手の集団成員性の操作は、送り手の所属を変えることで行った。内集団条件では、送り手は参加者と同じサークルの同期であり、活動場所や時間について連絡することが多いために受け手である参加者とLINEでつながっていると教示した。外集団条件では、送り手は他サークルの渉外担当であり、活動場所や時間について相談することが多いために受け手である参加者とLINEでつながっていると教示した。

コミュニケーションの開放性の操作は、LINE画面を個人トークとするかグループトークとするかによって行った。開放性低条件では、呈示されるLINEのトーク画面は個人トーク、すなわち受け手である参加者と送り手しか内容を閲覧できないタイプのやりとりであるとし、トーク画面のヘッダー部分に「Aさん」という見出しを表示した上で、教示文内でも画面が個人トークであることを強調した。開放性高条件では、呈示されるLINEのトーク画面はグループトーク、すなわち参加者と送り手以外のメンバーも内容を閲覧できるタイプのやりとりであるとした。

## 質問項目

**受け手としてのスタンプ選択** 参加者は、送り手であるAから送られてきたLINEメッセージに対してどう反応するかを、スタンプを選択する形で回答した。スタンプの選択肢は、「かわいそう」「あら」「うんうん」「クスッ」「わらえる」, 「スタンプは使わない」の6つであった。この内、「かわいそう」「あら」はつらさの表出, 「クスッ」「わらえる」はおもしろさの表出とした。送り手が選択するLINEスタンプはスキルマーケット coconala を通じて rieko 氏に作成を依頼した架空のものを使用した。

**操作チェック** 呈示されたLINEでの送り手が自分と同じサークルに属するかどうか、トークが個人トークだったかグループトークであったかを選択した。いずれの質問の選択肢にも「わからない」を含めた。

**自分の感情および送り手の感情推測** 参加者は「LINEでAさんが話していた友だちや、友だちがした経験に対し、あなたはいまどのように感じていますか。」と質問され、自分の感情8項目(つらさ、おもしろさ、楽しさ、怖さ、驚き、うらやましさ、良い気分、悪い気分。いずれも田中・小森, 2020で使用)に対して1. 全く感じていない~6. 非常に感じているの6件法で回答した。次に、送り手の感情推測を上記と同じ8項目6件法で行った。

**ターゲットへの態度および送り手の態度推測** 続けて「LINEでAさんが話していた友だちのこ

とを、あなたはどのように思いますか。」と質問され、ターゲット人物（送り手が言及していた人物）に対する自分の態度2項目（好ましいと思う、好ましくないと思う。いずれも田中・小森、2020で使用）に1. 全くそう思わない～7. 非常にそう思うの7件法で回答した。続けて、送り手の態度推測を上記と同じ2項目7件法で行った。

**送り手との結びつき** 送り手に対する結びつきを測定する7項目（信頼できる、結びつきを感じる、気が合いそうなど。いずれも田中・小森、2020で使用）に7件法で回答した。

**送り手としてのスタンプ選択** 最後に別のLINE画面として「自分が受講していた授業の担当教員がストーリーミング動画の録画ボタンを押し忘れて最後までオンライン授業を行い、終わってからそれに気が付いた」というエピソードが呈示され、参加者は自分が送り手としてその話をするなら、最後にどのスタンプをつけるかを尋ねられ、先ほどと同じ6つの選択肢（5つのスタンプまたは「スタンプは送信しない」）から1つを選んだ。LINE画面の見出しや設定は条件に対応していた。

## 結果

### 分析対象者の抽出

本実験参加者646名の中で本実験のダミー質問2問に不正解だった者、本実験の最後での同意チェックで同意が得られなかった者、欠損値が多いまたは大問2つ以上で同じ数値を回答していた者を分析対象から除外した。また、データ入力ミスで重複入力が1名分あったため、それを削除した。加えて操作チェックとしてLINE画面呈示の直後に尋ねていた操作チェック2項目（話し手の集団成員性、開放性）に正解していた者を抽出したところ、分析対象者は226名（男性94名、女性132名、平均年齢20.02歳）となった。条件ごとの参加者数は22～38名だった。

### 指標作成

送り手の感情推測および受け手の感情の両方について、「おもしろさ」「楽しさ」「よい気分」および「つらさ」「怖さ」「悪い気分」の相関係数を算出したところ、いずれにおいても有意な正の相関が見られたため ( $r=.43\sim.90$ )、それぞれをまとめて送り手ポジティブ感情推測、受け手ポジティブ感情、送り手ネガティブ感情推測、受け手ネガティブ感情とした。また、送り手の態度推測と受け手の態度それぞれについて、「好ましくない」を逆転して、「好ましい」との平均を求め、それぞれ送り手推測態度、受け手態度とした。送り手に対する結びつきの項目は先行研究（田中・小森、2020）に倣って合計を算出し、結びつき指標とした ( $\alpha=.95$ )。更に、参加者ごとに送り手の感情推測8項目と受け手の感情8項目の相関係数を算出し、感情相関とした。条件ごとの送り手の感情推測、受け手の感情、感情相関、送り手の態度推測、受け手の態度、結びつき知覚の平

表2 送り手スタンプ×集団成員性×開放性ごとの主要従属変数の平均値

送り手表出 集団成員性 開放性 N	笑顔				泣き顔			
	内集団		外集団		内集団		外集団	
	低 35	高 20	低 31	高 23	低 20	高 20	低 35	高 21
送り手つらさ推測	2.03 (1.18)	2.25 (1.16)	1.87 (1.18)	2.09 (1.08)	3.70 (1.49)	3.65 (1.66)	3.26 (1.42)	3.71 (1.23)
送り手おもしろさ推測	5.20 (1.23)	4.75 (1.25)	5.03 (1.52)	4.96 (1.15)	2.80 (1.64)	2.80 (1.44)	2.91 (1.60)	2.9 (1.67)
受け手つらさ	2.89 (1.47)	3.00 (1.30)	3.35 (1.40)	3.04 (1.22)	3.25 (1.33)	3.15 (1.46)	3.06 (1.24)	3.57 (1.36)
受け手おもしろさ	2.31 (1.39)	2.55 (1.61)	2.29 (1.16)	2.65 (1.11)	1.70 (0.92)	1.85 (1.09)	1.97 (1.15)	1.90 (1.37)
送り手ポジティブ感情推測	4.83 (1.05)	4.43 (1.17)	4.61 (1.33)	4.48 (1.05)	2.52 (1.21)	2.52 (1.24)	2.64 (1.46)	2.57 (1.54)
送り手ネガティブ感情推測	1.84 (0.98)	2.02 (0.98)	1.95 (1.15)	2.09 (1.02)	3.28 (1.39)	3.18 (1.34)	2.92 (1.15)	3.29 (1.01)
受け手ポジティブ感情	2.33 (1.24)	2.27 (1.31)	2.23 (1.18)	2.25 (0.86)	1.72 (0.80)	1.90 (0.87)	1.91 (0.87)	1.73 (1.20)
受け手ネガティブ感情	3.19 (1.15)	3.23 (0.97)	3.41 (1.12)	3.48 (1.02)	2.82 (0.98)	2.94 (0.94)	2.85 (0.96)	3.00 (1.06)
感情相関	0.06 (0.58)	0.06 (0.59)	0.06 (0.56)	-0.02 (0.57)	0.40 (0.43)	0.42 (0.43)	0.44 (0.51)	0.53 (0.49)
送り手態度推測	3.64 (1.45)	3.65 (1.81)	4.08 (1.67)	4.09 (1.58)	3.75 (1.52)	4.38 (1.85)	4.11 (1.48)	3.52 (1.42)
受け手態度	3.31 (1.40)	3.55 (1.20)	3.34 (1.42)	2.96 (1.18)	3.83 (1.24)	3.70 (1.63)	3.47 (0.92)	3.02 (1.63)
結びつき	17.66 (9.82)	18.10 (10.28)	16.06 (8.24)	17.74 (8.14)	24.65 (8.95)	22.7 (8.37)	21.86 (8.58)	25.05 (9.76)

注) カッコ内は標準偏差を示す。

均値と標準偏差を表2にまとめた。

参加者の回答を基に、感情一致度のカテゴリも作成した。具体的には「つらさ」では差分が0のものを一致度高 ( $n=88$ )、それ以外を一致度低 ( $n=134$ ) とした。「おもしろさ」では差分が絶対値1以内であったものを一致度高 ( $n=98$ )、それ以外を一致度低 ( $n=124$ ) とした。

### 送り手の感情推測

まず、送り手感情推測項目の「つらさ」と「おもしろさ」を繰り返し要因として、2(送り手表出)×2(集団成員性)×2(開放性)×2(感情種類)の反復測定分散分析を行ったところ、送り手表出の主効果 ( $F(1, 215)=12.62, p<.001, \eta^2=.06$ )、感情種類の主効果 ( $F(1, 215)=39.91, p<.001, \eta^2=.16$ )、送り手表出×感情種類の交互作用 ( $F(1, 215)=118.14, p<.001, \eta^2=.36$ ) がそれぞれ有意だった。Bonferroni法を用いて交互作用の下位検定を実施したところ、笑顔条件では「おもしろさ」( $M=4.97, SD=1.33$ ) が「つらさ」( $M=2.03, SD=1.19$ ) よりも強く推測されており ( $p<.001$ )、泣き顔条件では「つらさ」( $M=3.55, SD=1.44$ ) が「おもしろさ」( $M=2.81, SD=1.54$ ) よりも強



く推測されていた ( $p < .001$ )。どちらのスタンプが送られた場合も、それに対応する感情が強く推測されていることから、仮説1は支持された。

送り手のポジティブおよびネガティブ感情(感情価)に対しても同様の2(送り手表出)×2(集団成員性)×2(開放性)×2(感情価)の反復測定分散分析を行ったところ、単項目と同様、送り手表出の主効果 ( $F(1, 217)=33.03, p < .001, \eta^2=.13$ ), 感情価の主効果 ( $F(1, 217)=40.61, p < .001, \eta^2=.16$ ), 送り手表出×感情価の交互作用 ( $F(1, 217)=116.92, p < .001, \eta^2=.35$ ) が有意で、単項目と同じパターンが得られた。よって、仮説2も支持された。

### 受け手の感情

送り手の感情推測の分析と同様に、「つらさ」と「おもしろさ」を繰り返し要因として、2(送り手表出)×2(集団成員性)×2(開放性)×2(感情種類)の反復測定分散分析を行ったところ、送り手表出の主効果 ( $F(1, 216)=5.96, p=.02, \eta^2=.03$ ), 感情種類の主効果 ( $F(1, 216)=45.12, p < .001, \eta^2=.17$ ), 送り手表出×感情種類の交互作用 ( $F(1, 216)=6.19, p=.01, \eta^2=.03$ ) が有意であった。Bonferroni法を用いて交互作用の下位検定を実施したところ、「おもしろさ」における送り手表出の単純主効果が有意で、「おもしろさ」は笑顔条件 ( $M=2.36, SD=1.30$ ) のほうが泣き顔条件 ( $M=1.80, SD=1.10$ ) よりも強く感じられていたが ( $p < .001$ ), 「つらさ」には有意な差は見られなかった ( $p=.64$ )。

同様に、参加者自身のポジティブ感情およびネガティブ感情に対しても送り手の感情推測と同様の2(送り手表出)×2(集団成員性)×2(開放性)×2(感情価)の反復測定分散分析を行ったところ、送り手表出の主効果 ( $F(1, 218)=25.93, p < .001, \eta^2=.11$ ) および感情価の主効果 ( $F(1, 218)=74.88, p < .001, \eta^2=.26$ ) が有意で、笑顔条件 ( $M=2.72, SE=0.06$ ) のほうが泣き顔条件 ( $M=2.28, SE=0.06$ ) よりも感情が強く感じられ、ネガティブ感情 ( $M=3.02, SD=1.11$ ) のほうがポジティブ感情 ( $M=2.01, SD=1.06$ ) より強く感じられていた。

いずれの分析においても、集団成員性や開放性の違いに応じた受け手の感情の有意な違いは見られず、仮説3および仮説4は支持されなかった。

### 送り手と受け手の感情共有

感情関連の値に対して、送り手表出×集団成員性×開放性の分散分析を実施した。その結果、送り手表出の主効果 ( $F(1, 203)=29.78, p < .001, \eta^2=.13$ ) が有意だった。集団成員性や開放性に関わらず、泣き顔条件 ( $M=.45, SD=.47$ ) のほうが、笑顔条件 ( $M=.04, SD=.56$ ) よりも自分の感情と送り手の感情推測の相関係数が大きく、感情共有が見られていた。集団成員性や開放性の違いに応じた感情関連の違いは見られず、仮説5は支持されなかった。

次に、受け手としてのスタンプ選択の分析を行った。条件ごとの選択結果を一覧にすると表3

表3 送り手スタンプ×集団成員性×開放性ごとのメッセージ受信時のスタンプ選択

送り手表出 集団成員性 開放性	笑顔				泣き顔			
	内集団		外集団		内集団		外集団	
	低	高	低	高	低	高	低	高
かわいそう	3 (8.3%)	2 (10.0%)	3 (9.1%)	1 (4.4%)	4 (16.0%)	6 (26.1%)	6 (15.8%)	3 (13.0%)
あらら	13 (36.1%)	12 (60.0%)	19 (57.6%)	12 (52.2%)	15 (60.0%)	14 (60.9%)	17 (44.7%)	12 (52.2%)
うんうん	1 (2.8%)	1 (5.0%)	1 (3.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.6%)	0 (0.0%)
クスッ	5 (13.9%)	1 (5.0%)	1 (3.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (4.4%)
わらえる	3 (8.3%)	0 (0.0%)	2 (6.1%)	2 (8.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
不使用	11 (30.6%)	4 (20.0%)	7 (21.2%)	8 (34.8%)	6 (24.0%)	3 (13.0%)	14 (36.8%)	7 (30.4%)

注) カッコ内の数値は列%を示す。

の通りとなった。いずれの送り手表出でも「かわいそう」「あらら」(笑顔条件58.0%, 泣き顔条件70.6%)の方が「クスッ」「笑える」(笑顔条件12.6%, 泣き顔条件0.9%)よりも選択されていた。送り手の表出ごとに受け手のスタンプ選択に対して集団成員性×開放性を独立変数とするカイ2乗検定を実施したが、統計的に有意な差は見られなかった(笑顔 $\chi^2(5, N=112)=2.64, p=.76$ , 泣き顔 $\chi^2(4, N=109)=3.44, p=.49$ )。よって仮説6は支持されなかった。

ただし、受け手としてのスタンプ選択では、送り手の表出に応じた違いが見られた。スタンプ選択に対し、送り手表出を独立変数とするカイ2乗検定を実施した結果、統計的に有意な結果が得られ( $\chi^2(5, N=221)=16.07, p=.007$ )、残差分析の結果、「かわいそう」スタンプは泣き顔条件(17.4%)のときに笑顔条件(8.0%)よりも多く選ばれていた。一方、「クスッ」(6.3%)「笑える」(6.3%)のスタンプは笑顔条件のときに、泣き顔条件(「クスッ」0.9%「笑える」0%)よりも選ばれていた。

次に、感情一致・不一致がスタンプ選択に及ぼす影響について分析を行った。まず「つらさ」の感情一致カテゴリと送り手表出を独立変数として、受け手としてのスタンプ選択に対してカイ2乗検定を実施した。その結果、笑顔条件のとき( $\chi^2(5, N=111)=12.17, p=.03$ )と全体( $\chi^2(5, N=217)=16.43, p=.006$ )とで統計的に有意な結果が得られ、残差分析の結果、「クスッ」のスタンプは一致度が高いときにしか選ばれていなかった(笑顔条件15.2%, 全体9.3%)。送り手表出にかかわらず「あらら」のスタンプは一致度が低い(58.0%)ときに高いとき(41.9%)と比べて送られやすかった。続いて「おもしろさ」の感情一致カテゴリと送り手表出を独立変数として、同様のカイ2乗検定を行った。その結果、全体としての結果は有意傾向であった( $\chi^2(5, N=219)=10.06, p=.074$ )。集団成員性および開放性の効果は見られなかったため、仮説7は支持されなかった。

### ターゲット人物に対する送り手の態度推測と受け手の態度

感情一致カテゴリの群ごとにターゲット人物に対する送り手の態度推測得点と、ターゲット人物に対する受け手の態度の相関係数を算出した。その結果、「つらさ」カテゴリでも「おもしろさ」カテゴリでも、感情一致高群で自分と送り手の態度の間に有意な正の相関が見られた一方（つらさ； $r(87)=.48, p<.001$ , おもしろさ； $r(97)=.54, p<.001$ ）、感情一致低群では相関係数は一致高群よりも小さく、有意ではなかった（つらさ； $r(133)=.17, p=.06$ , おもしろさ； $r(125)=.07, p=.44$ ）。よって、仮説8は支持された。

### 送り手との結びつき知覚

感情一致高低が結びつき知覚に及ぼす影響を検討するために、結びつき得点の合計に対して感情一致高低を独立変数とする対応のない  $t$  検定を「つらさ」と「おもしろさ」カテゴリごとに実施した。その結果、いずれのカテゴリでも感情一致高群（つらさ； $M=22.16, SD=9.36$ , おもしろさ； $M=24.76, SD=9.58$ ）で感情一致低群（つらさ； $M=18.98, SD=9.02$ , おもしろさ； $M=16.52, SD=7.32$ ）よりも結びつき知覚が有意に高かった（つらさ； $t(220)=2.53, p=.006, d=.35$ , おもしろさ； $t(176.74)=7.05, p<.001, d=.98$ ）。よって仮説9は支持された。

### 新規のコミュニケーションにおける行動協調

最後に行動協調について分析した。感情一致高低条件ごとのスタンプ選択の結果に対して、送り手表出と「つらさ」の感情一致カテゴリを独立変数とするカイ2乗検定を実施した。その結果、統計的に有意な結果は得られなかった（ $\chi^2(5, N=221)=3.86, p=.57$ ）。続いて送り手表出と「おもしろさ」の感情一致カテゴリを独立変数として、同様のカイ2乗検定を行った。その結果、全体としての結果（ $\chi^2(5, N=223)=15.91, p=.007$ ）および泣き顔条件の結果（ $\chi^2(5, N=107)=19.19, p=.002$ ）が統計的に有意であった。残差分析の結果、感情一致高群は感情一致低群と比べ、「笑える」スタンプ（高群32.7%、低群15.2%）を送りやすく、「送らない」（高群17.3%、低群32.0%）を選びにくかった。片方の感情一致カテゴリにおいて仮説と一致するパターンが見られ、仮説10は一部支持された。

## 考察

本研究では二者間の感情共有が促進される状況の特徴について検討するために、架空のLINE画面での感情コミュニケーション場面を作成して実験を行った。参加者は受け手になったつもりで複数の感情が生じえる状況について送り手が説明したLINE画面に目を通した後で、メッセージの送り手との感情共有の程度や結びつきを回答し、送り手に対する反応および新しいコミュニ

ケーション場面における自分自身の発信のためにスタンプ選択を行った。その際、コミュニケーションの送り手の集団成員性とコミュニケーションの開放性とが実験的に操作された。

実験の結果、参加者はLINEメッセージの内容に基づいて送り手の感情を理解していたものの(仮説1・2支持)、集団成員性やコミュニケーションの開放性は送り手との感情共有や送り手に対する態度、送り手との結びつき知覚、協調行動に系統的な影響は与えていなかった(仮説3・4・5・6不支持)。これらに強く影響していたのは、送り手から伝達された感情の内容だった。一方、送り手と感情共有していた参加者はそうでない参加者と比べ対象人物に対する態度を共有し、送り手との結びつき知覚を強めていた(仮説8・9支持)。送り手との協調行動は送り手との感情共有の程度ではなく、送り手からの伝達内容の影響を強く受けていた(仮説7・10不支持)。

本実験では、コミュニケーション相手の集団成員性もコミュニケーションの開放性も、想定した影響を及ぼしていなかった。これは本研究における集団成員性の操作が内集団と外集団とをうまく分けられていなかったためかもしれない。本研究では参加者をスポーツサークルの渉外担当と想定してもらい、内集団成員として同サークルの学生、外集団成員として自分とは異なるサークルに所属する渉外担当学生を提示したが、外集団成員も役職を同じくする仲間、すなわち内集団成員であると想定された可能性が考えられる。加えて、感情経験を伝えてくる時点で送り手と自分はある程度仲が良いのだろう(事務連絡だけをする間柄でいきなり感情経験を伝えてくることはないだろう)とか、相手とは今後もサークル活動に関して交渉をする必要があるため、関係維持を志向していく必要があるといった推測も生じた可能性がある。こうしたことから、全体として外集団条件で操作が有効でなかった可能性がありえる。また、これは開放性の操作が有効でなかったことの説明としてもあてはまるが、架空の相手とのLINE画面の呈示では、操作のインパクトがそれほど大きくなかった可能性が考えられる。実際の知り合いを相手として想定させた上で回答を求めた方が、集団間の違いや開放性の違いが生じやすかったかもしれない。

ただし、これらを鑑みると、そもそも相手から感情エピソードを伝達されるという経験そのものが集団の境界線をあいまいにしている可能性も考えられる。感情を特定の相手と共有しようとする自発的な試み自体は自己開示の一つともいえ、相手に対して親密性を感じていることの証左として受け取られる可能性もある。今後はこうした伝達の自発性や志向性の影響も考慮した検討が必要だろう。

### 共有される感情の内容の影響

本実験のLINE画面で呈示された「(送り手の)友人がシュートを決めようとして転んだ」というエピソードに対しては、全条件を通じておもしろさよりもあわれみを感じた参加者が多かった。ただし、送り手がそのエピソードに対して「笑える」と反応していた場合には、少数派ではあったものの、おもしろさを感じる参加者がいた。また、送り手の感情とは不一致のあわれみを表す

スタンプが多く選択されていた。一方、送り手が同じエピソードに対して「かわいそう」と反応していた場合には、参加者はおもしろさを感じにくく、送り手の感情と不一致の感情であるおもしろさを意味するスタンプは全く選択されなかった。つまり、送り手がおもしろさを表出した場合には受け手の反応に多様性があったが、送り手があわれみを表出した場合には、感情共有以外の選択肢が選ばれにくかった。この結果は、内集団成員が「あこがれ」を表出した場合に、「おもしろさ」が抑制されていた田中（2019）の結果にも重なり、送り手によって伝達される感情の種類も感情共有（あるいは非共有）に影響を及ぼす可能性を示唆する。

こうした制約がなぜ生じていたかについては推測の域を出ないが、呈示された場面における表出の社会的望ましさの影響が考えられる。他者が痛みを感じる場面においてあわれみを表出することは社会的に適切である一方、対象人物を嘲笑することになる「おもしろさ」を感じることは不謹慎さが感じられたのかもしれない。このような場合には、相手がおもしろさを表出した場合のみ、参加者も抵抗感を感じることなく感情を共有できた可能性が考えられる。また、他者の表出がエピソードのどの部分に注目するかを方向づけた可能性も考えられる。「おもしろい」という表出があった場合、参加者は「きれいに空振りした」という箇所注目するが、「かわいそう」という表出があった場合「ひっくりかえって足首をひねった」という箇所に注目すると考えられる。「きれいに空振りした」に対してはおもしろさと一緒に、恥ずかしい姿をさらされることへのあわれみが生じるかもしれないが、痛みやケガを連想させる「足首をひねった」という内容におもしろさを感じることはないだろう。

本研究では、相手との感情共有経験が態度の共有や結びつき知覚を促進するという方向での因果関係が示された。これらの結果は先行研究（田中，2019，田中・小森，2020）の結果とも一致する。また、「おもしろさ」の感情共有経験は、新規のコミュニケーションにおける積極的な感情表出を促進しており、感情共有経験の効果に関しても、共有される感情の種類が影響を及ぼす可能性を示唆している。相手との感情共有の経験は相手に対する評価や相手とのその後の行動協調の程度に影響を及ぼすことも示されている（e.g., Avry et al. 2020）。こうした感情共有の機能について考える際にも、共有される感情の内容が影響を及ぼしている可能性について、引き続き検討する必要があるだろう。

**【付記】** 本研究はJSPS 科研費JP18K03017の助成を受けたものです。

## 引用文献

- Avry, S., Molinari, G., Betrancourt, M., & Chanel, G. (2020). Sharing emotions contributes to regulating collaborative intentions in group problem-solving. *Frontiers in Psychology, 11*, 1160.
- Ekman, P., & Friesen, W.V. (1975) *Unmasking the face*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

- (エクマン, P., フリーゼン, W. V., 工藤 力 (訳編) (1987) 表情分析入門 誠信書房)
- Peters, K., & Kashima, Y. (2007). From social talk to social action: Shaping the social triad with emotion sharing. *Journal of Personality and Social Psychology*, *93*(5), 780–797.
- Schwarz, N., & Clore, G. L. (2003). Mood as information: 20 years later. *Psychological Inquiry*, *14*(3), 296–303.
- 田中知恵 (2019). 送り手の集団成員性が受け手の感情共有に及ぼす影響 明治学院大学心理学紀要, 29, 19–30.
- 田中知恵・小森めぐみ (2020). 送り手の集団成員性が受け手の感情共有や結びつきに及ぼす影響 明治学院大学心理学紀要, 30, 1–12.

# The Effects of Communication Partner's Group Membership and Communication Openness on Emotional Sharing and Perceived Connection: An Examination Using LINE Chat Screens

Megumi KOMORI  
Tomoe TANAKA

This study investigated the effects of group membership and openness (presence or absence of a third party) on emotion sharing and relationship recognition in dyadic communication using a web experiment. Six hundred forty-six participants were presented with fictitious LINE messages and were asked to answer questions about their own emotions, their perception of the sender's emotions, and their perceived connection with the sender. The sender's group membership was manipulated, and the level of openness was manipulated by presenting messages as either individual or group chats. Results showed that group membership and openness did not affect emotion sharing. Still, attitude sharing was more promoted, and a stronger perceived connection with the sender was felt when participants shared emotions with the sender compared to when they did not. Furthermore, when the sender expressed a feeling of pity, other emotions were suppressed. These results suggest that emotion sharing contributes to maintaining relationships with others and that the content of expressed emotions may also affect emotion sharing.

Keywords: Emotion Sharing, Group Membership, Communication Openness